「森三郎の作品を読む会」通信　第７号

2013年1月11日　発行
森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

12月の「森三郎の作品を読む会」では、
「赤い鳥」昭和6年10月号初出作品
「鐘（伝説）」筆名　森三郎（「夜長物語」所収）
「夢買ひ（昔話）」筆名　茅原順三
を読みました。

明けましておめでとうございます。

初夢はいかがだったでしょうか？

初春のおめでたい夢なら、そのまま夢が合いますように。もし、悪い夢でも、昔の人は「夢違え」でよいものにとりなしていたそうです。

12月に読んだ「夢」という作品は、自分の身に幸運が来るようにと、他人の見た吉夢を買い求める話でした。

これは、「宇治拾遺物語」の中の巻一三ノ五「夢買人事」という、吉備真備の話を素材にしたものです。

「宇治拾遺物語」の中の話は、他人の出世の夢を買った吉備真備が、そののち学問をしてぐんぐん上達し、夢の通り、大臣にまでなったという話です。「だから夢をうっかり人に話すものでないよ」というのが、「宇治拾遺物語」の話の結語です。

森三郎さんの話では、子どもの頃の吉備真備を

「～郡司の一人息子でしたが、生れついてのなまけもので、学問も一つもせず年が年中ぶら～～あそびくらしてゐるといふ、村中でのわらはれものでした。」と設定しています。

そして、夢解きのおばあさんの家を出た後のことを、

「あれほど学問ぎらひの、なまけものだった吉備真備は、それからは一生けんめいに勉強をはげんでわづか三年で、人にもてはやされるほどの学者になり、やがて奈良の都へまねかれ、後に阿倍仲麻呂と二人で留学生として支那へ派遣されることになりました。

真備はそのとき年はわづか二十二でした。それから十九年の間、支那でいろ～～と深い学問をして、とう～～右大臣にまで上りました。」（引用はそのまま）

と書いています。この書き方は、きっと、まじめで、努力家の森三郎さんの姿勢を映すものだったでしょう。

夢占いのおばあさんの家での会話はユーモアもあり、現代の女性が聞いたら、ブーイングが起こりそうな個所もあります。でも森さんは本当は、「赤い鳥」読者の子どもたちに、運だけではだめだよ、なまけものだった真備も努力したんだよ、と語りかける思いだったのではないでしょうか。

表紙　「自転車」
清水良雄　画

次回予告　平成25年2月8日（金）午後1時～3時
「みかん」（「赤い鳥」昭和7年1月号初出）
「虎」　（「赤い鳥」昭和7年2月号初出・
森三郎童話選集「かささぎ物語」所収）